

千里山時代のあそび (二)

二十回生 久保 利也

てのひらに秋の陽こぼれとおき日の

おひとつおふたつ お手玉の唄

美原凍子 (福島市)

第十一号の刊行を見計らったように十月二十七日の朝日新聞に掲載されたこの短歌を詠んで、まだまだ大正昭和は元気に、楽しく引き継がれていることを確認しました。

おじやみという呼称、史的観点からいうと、いしなご(石投)が前身でこれより「なんこ」「なんご」とお手玉、お弾き系へと名称と共にアソビカタも変遷してゆきます。資料に残るものだけでも一五九種類の呼称があり、遊びの形式、方法も小石、木の実、貝類からどんどん進化して布製の小袋に小豆や小石、もみがら、木の実などを入れて幾千万人の子供達が、特に女性が遊び興じ、全国津々浦々に流布し、伝承され継承され

明治三十八年真下飛泉 作、三善和氣 作曲

「戦友」

一. ここはお国の何百里、離れて遠き満州の
赤い夕日に照らされて、友は野末の石の下
二. 思えばかなし昨日まで、真先かけて突進し
散々敵を懲らしたる 勇士はここに眠れるか
お手玉の歌としてはなんとなくわびしい、空しい歌詞が十四番まで続きます。私はおじやみの歌というよりも伯父か伯母だったかが子守唄のように歌ってくれていた記憶があります。

汽笛一声新橋を

はや我汽車は離れたり

愛宕の山に入りのこる

月を旅路の友として…で始まる鉄道唱歌もお手玉歌として記録されていますが、高輪、泉岳寺、品川、大森、川崎、鶴見、横浜ステーション…と東海道を下って六十六番まであることは知りませんでした。

全曲をごらんになりたい方は東京書籍(株)発行「童遊文化史、お手玉歌」をご参照ください。

たとあります。

そしてお手玉の歌として約百種類位の記録が残っていますが、正確に記憶しているものがないので文献を調べていきましたら、驚いたことがいくつかありました。私たちが唱歌として歌っていたものや、平和な現代では口にしてはならないような文言のものが多くあります。

一列談判(いちれつらんぱん)

一、一列談判破裂して

二、日露戦争始まった

三、さつさと逃げるはロシア兵

四、死んでも(死ぬまで) 尽すは日本の兵

(御門の兵)

五、五万の兵(御門の兵)を引き連れて

六、六人残して皆殺し

七、七月八日の戦いに

八、ハルピンまでも攻め込んで

九、クロボトキン(クロパトキン)の首を取り

十、東郷元帥(大将) 万々歳

(十でとうとう大勝利)

瓦たおし

これは前号にて予告の通り、毎年やって来る台風の中で特に猛烈な勢力を保ったまま大阪方面へ上陸してくる奴が、塀や看板、植木などを薙ぎ倒した上に、屋根瓦までまるで木の葉のように吹き飛ばすのです。雨漏り補修や、ガラス屋さんが取替え作業の下で破片の拾い集めを手伝いながら、カタチの良いカワラを探していた姿がつい先刻のように想い出されます。子供達即ち我々はこれを上手に加工し、投げやすく、立ちやすく、倒れにくく工夫して加工するのです。加工といっても家屋の布基礎や犬ばしりのコンクリートにこすりつけるという作業です。

三メートルほどの距離をおいて向かい合わせに二本の線を引き、両サイドに分かれて各自のカワラを立てる。ジャンケンで勝った方からゲームを始めます。

① 自分サイドの線から相手の瓦をめがけて瓦を投げ、一回で当てる、倒す。

② 線から瓦を手近かのところへ投げ一歩とんで瓦を踏み、瓦を拾ってケンケンのままで相手の瓦に投げ当てる。

おしくら饅頭

平成二十年四月二十二日付日本経済新聞のコピー
を萩原直大氏が送ってくれました。そのままここに転載いたします。

作家 林 望

そういえば、と、はるかな昔を思い出した。
遠い昔の子どもの遊び。

おしくら饅頭
押されて泣くな

道端で、空地で、学校で、私たちが子どもだった自分には、どこでも「おしくら饅頭」をしたものだ。とくにこういうことをしたのは冬の寒い朝などであった。

昔は、総じて夏は暑く冬は寒かった。

東京でさえ、冬の寒い朝が幾日か続く。学校の池などに、分厚い氷が張って、小学生が乗って遊んでも割れる気遣いはなかった。

そういう寒い朝、みんな盛大に白い息を吐きながら学校に登ると、まだ教室にストーブの火

③ 線から瓦を投げ、ケンケンで二歩とんで瓦を踏み、瓦を拾ってケンケンのままで相手の瓦に投げ当てて倒す。

④ 線から瓦を投げ、ケンケンで三歩とんで瓦を踏み、瓦を拾ってケンケンのままで相手の瓦に投げ当てて倒す。

⑤ 線から瓦を投げ、ケンケンで三歩とんで瓦を踏み、ケンケンのまま相手の瓦に自分の瓦をけり当てる。

⑥ 線から瓦を頭の上に乘せて歩いてゆき、相手の瓦の上で頭から落とした瓦で相手の瓦を倒す。

⑦ 線から瓦を肩の上に乘せて歩いてゆき、落として相手の瓦に当てる。

⑧ 線から瓦を胸に乘せて歩いてゆき、落として相手の瓦に当てる。

⑨ 線から瓦を膝にはさんでケンケンでとんでゆき落として相手の瓦に当てる。

⑩ 線から瓦を足の甲に乘せてケンケンでとんでゆき、落として相手の瓦に当てる。

もちろん失敗したら相手に代わり、次の順番が回ってきた時は、失敗した段階から続いて行うのです。

も入らず、どこもかしこも冷え切っていた。

「よし、おしくら饅頭！」

と誰かが言う。すると、クラス中の誰も彼もが、南の庭の日だまりに集まってきて、まるで猿山の猿団子みたいに体を寄せ合い、押し合いへし合いして遊ぶのだった。そのとき、自然に口を衝いて出るのが、「おしくら饅頭、押されて泣くな」の囁きことばだったのだ。

「おしくら」は、「押し競べ」が詰まって「押し競べ」となり、その語尾が飲み込まれて消えると「おしくら」になる。同様に「駆けつくら」「食べつくら」なんてことも言ったが、これらも今は使わない言い方になった。

人間の体は温かい。温かい血が通っている。だから、どんなに寒い朝だって、日だまりの陽と、子どもらの体温とで、すぐに寒さは去っていったことを私は忘れない。

体を寄せ合うのは温かくて気持ちがいい、こんなたわいもない遊びをしながら、しみじみ学んだのだ。

だけれど、どうして「おしくら饅頭」と、

「饅頭」が付くんだか、それが分からない。

みんながよりあつまって丸い饅頭みたいになるからだろうか、それとも、折詰め饅頭がぎゅうぎゅうと押し詰められているようなのを連想しているのだろうか。

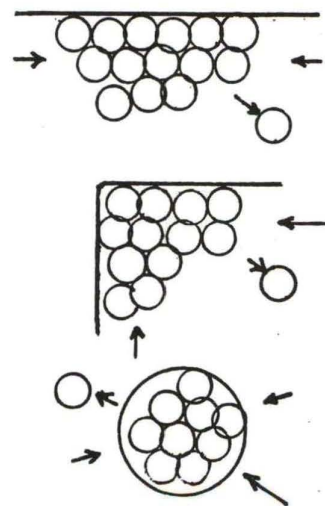
考えてみると、昔の子どもたちの遊びはけっこう乱暴だった。おしくら饅頭に夢中になって、多少どこかをぶついたりアザをでかしたりすることもあっただろう。みんなに取り籠められてぎゅうぎゅう押されるうちに、とうとう泣き出すような子だっていたかもしれない。だからこそ、僕らは「押されて泣くな」と念を押しながら、それでも手加減なんかしないで押し合ったのだ。

もっとも、こういう風に「押し合う」ことは、各地に「押し合い祭」という形の、押し合うことによって魂はやす祭が残っているのを想起すると、単なる児童戯ではなくて、もう少し民俗的な真行きがあったことかもしれない。

そうして、大切なことは、こういう形の体の触れ合いのなかに、切実な心のコミュニケーション

ヨンが養われたという機序である。
 押されて苦しい目を見ても、それは「楽しい苦しさ」で、決してそれを「いじめ」と混同するようなことはなかった。
 そういう健全な触れ合いを忘れてしまつて、コンピュータのなかで殺伐と遊んでいる現代の子どもたちが、どうかすると温かな人間関係はぐくみ得なくなつてしまつたのは、思えば当然かもしれない。
 悲しい世の中になつたものだという思いが心にトゲを刺すのである。

前号から私が訴えております子どものアソビかた、アソビ場所、ツール、親を含めた年長者の対応などの一面を、みごとに締め括つておられますので、敢えて掲載させていただきます。
 さて、どうして「饅頭」がつくのかとの疑問に興味を抱き調べた結果を付記いたします。
 江戸期には「めじろおし」と呼ばれていたようで、メジロが枝上に止まつて互いに押し合う、押し合つて



いる内にはじき出された一羽が落ちては枝上に戻る、強く押されるとあんこがとび出してしまふ、つまり相互に押し合い、押し出されるという行動がこの遊びのスタートです。

一列(横列)、直角コーナーあるいは円形陣を描いてまわりから背中で押し合うものです。手や足を使つてはなりません。

子どもは風の子とて、寒い北風にもめげず、校舎の壁や、廊下の隅っこへ向かつて背中から突っ込んでゆくのです。そして力一杯押し合うことでぬくもりを求めた記憶があります。
 元気いっぱい時代でした。

ゴムとび

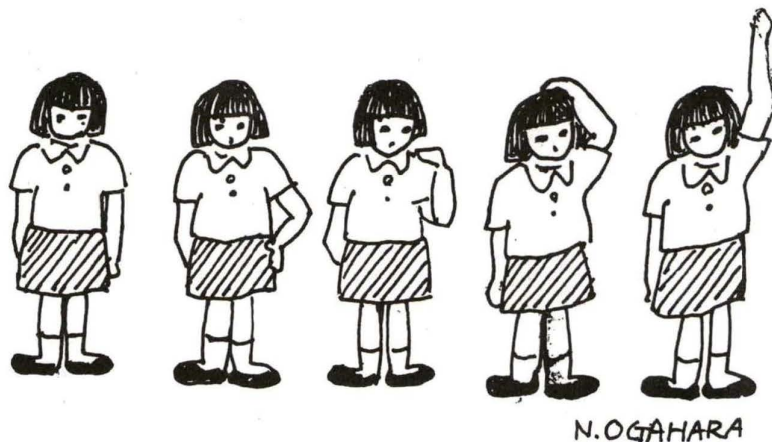
昨今のように輪ゴムが豊富にない時代、下着のオフルから抜きとつてきたゴムをつなぎたしめたものをだれかが持つてくるとこの遊びがはじめられます。

人数の多いときにはジャンケンに負けた二人がゴムの持ち役で、人数が少ないときは片方を電信柱や街路樹の幹に結んだりしてだんだん高くしてゆくゴムを跳び越す遊びです。

最初は地面すれすれ、つまり靴やぞうりで踏んだゴムを跳び、ひざ、腰、肩、頭、そして頭上いっぱい手を伸ばした高さのゴム紐を跳び越すのです。

腰の高さぐらいまではオトコトビと称して、ゴム紐に触れてはならない、それ以上の高さになるとオンナトビと称して、走つて来てゴムの手前で片足をゴムにひっかけて押さえておいて跳ぶ。更に高くなるとオデツキと称して四つんばいになり、片足を高くあげてゴムをまたぐことが出来たら合格です。

高さが上がるごと、脱落者が増えて来て、跳んでいる者は表情が真剣になってきます。とり残されないようににみんな必死に頑張りました。



なわとび

わたし達の基本的な運動は「走・跳・投」であり、これがアソビの原点です。

その「跳び」のグループにゴム跳びがあり、更に動的なのが「なわとび」です。ゴム跳びのゴムは動きません。縄跳びは紐（ロープ）をスピーディーに、複雑に動かしてそれを跳び、くぐるという遊戯です。

わたし達の時代は既にロープがありました。昭和以前では炭俵や米俵に使った縄を利用していたように、藁縄は軽くて回しにくいので中央の部分を水に浸して重くしたり、中央部に結び目を作って重くしたりしていたという記録が残されています。

今では回数表示メーター付きのもの、カラフル発光のものなどビニール製が市販されています。

一人跳び、二人跳び以上と人数によってロープの長さも四、五メートルぐらいまで、校庭や空地、路上でも賑やかに仲間に入りました。

一人跳び

- ① 縄の両端を左右で持つて、前（まえ）回しあるいは後（うし）ろ回しで跳ぶ。

② 跳び入り型

- (1) 一人の者が一人跳びの要領で跳ぶ。他の一人は斜め前方にいて跳ぶ位置、タイミングを見定めて跳んでいる者の前方に入り、二人一緒に跳ぶ。

- (2) 何回か跳んだら側方へ出て、待っている他の者と交代したりまた入ったりする。参加者の多い時は順番を決めたりして跳びます。

- (3) 失敗したときは、縄を持って跳ぶ人と交代したり、いろいろなバツ、例えばシッペとかデコピンがあつたりしました。

遊ぶ場所や人数、そして縄の長さに応じていろいろな跳び方、遊び方を工夫しましたが、「おじょうさんおはいりー」なんて歌に合わせて大勢の者が並んで跳んで、もしも失敗した者がいてもいじめたり、のけものにしたことはありませんでした。

この頃の遊び即ち「千里山時代のあそび」は昭和四十年以降、高度経済成長の美名の隠れみゝとして、社会的、世相的に大きな変革がもたらされ、生活環境の急変と共に子供達の自然な姿のアソビが下降の一途を

- ② 跳び方に片足跳び、両足跳びがある。
- ③ 一回回し、二回回し、三回回しなどがある。
- ④ 交差跳びは、腕を交差させて縄を回しながら跳ぶ。

二人または三人跳び

① 横隊型

- (1) 二人が横に並び、一本の縄を外側の一端を持ち、内側の腕は肩を組むようにして跳ぶ。
- (2) 縄を前回しあるいは後ろ回しに回転させ、二人が一組になって跳ぶ。
- (3) 二人一組の何組かを編成し、組対抗形式で跳ぶ回数を競ったり、主として前方へ距離や速さを争ったりしました。

② 縦隊型

- (1) 少し長めの縄を用意して、一人跳びの要領で縄を持つ。その前方あるいは後方に他の一人が入る。
- (2) 縄を持った者と他者が呼吸を合わせて、二人と一緒に跳ぶ。
- (3) 縄を持った者に対して、前向きあるいは後ろ向きで跳ぶ。その前後に一人ずつ並んで三人



たどることになります。

遊ぶ場所がない、仲間が少なくなった、高度な遊具特に室内ゲームの急成長の影響で、戸外で遊ぶ時間が少なくなった等々、遊戯史上かつてない危機を迎えています。この縄跳びは童遊びというより、スポーツの基礎体力作り、トレーニングとして一般的には美容運動、健康管理などの観点から脚光を浴び、推奨されて現存しているアソビの元祖です。

数年前に中国雑技団の来日公演を観ましたが、その中の「なわとび」は、日本古来のサーカスの演目を更に改良、複雑、難解な曲技的に研究されたもので固唾をのんだ記憶があります。とても人間の身体とは信じられない摩訶不思議な躍動と激しい動き、一糸乱れぬ絶妙なるチームワークそして体力に驚嘆、感激、敬服したことでした。

あやとり

古くは「糸とり」と呼ばれていたようで「江戸にてあやとり、京坂にては糸取と云戯也」とありますが、千里山時代でも「あやとり」と称していました。一メートル内外の太めの糸、あるいはヒモで一人綾、二人綾など工夫しながら楽しんだことですが、初めは年長者から教えられたものを仲間、そして幼い児たちに教えて伝えられてきたものです。

学校の休み時間に「ここここ、はさんで中から上へ通すんや」と、教えられながら夢中になったのは女性のやわ肌とすれ違いタッチの感触を楽しみにしていたのかも知れません。

綾取り遊びは一般的には女性の遊びとされているようですが、昭和四十六年五月にNHKテレビで、綾取り研究学者方の解説が放映され、これが世界的に人気ある遊びとしてとりあげられました。特にエスキモーでは単なる遊びではなく、大人の間でも盛んで、大きな複雑な形造りが行われ、しかも社交的に行われていたということ、冬季は太陽が全く見られないので、

室内で老若男女があやとりに興じていること、即ち家族全員が近隣の人達と一緒にたのびながら楽しい時間を過ごしていたという事実です。

そして世界各国の出演者の模範演技では、それぞれのお国柄の綾取りを披露しましたが、造形的には大同小異ながらその命名が、椰子の木とか、レインボウ、パラシュート、コンドル、ベッドなどとお国にふさわしい名前をつけていました。

さて、数十年前に遊んでいたことを今一度思い出してくださって、どうぞお子さまやお孫さま方と、この素朴な手先、指先の動きをご一緒に楽しみ伝え残していただきたいと念じつつ、そしてまたこの会誌を決して読み切りになさらないで何度も何度も繰り返し繰り返してくださるようにと、東洋出版(株) 昭和六〇年刊『むかしあそび大事典』をコピーいたしました。ぜひどうぞ、チャレンジしてみてください。

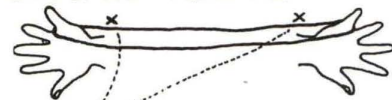


ひとりあやとり

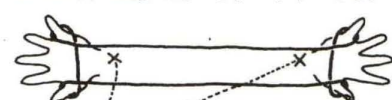
両手とり

(1) 伸び縮みするゴム

① ひもを、両方の小指にかける。



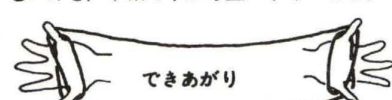
② X印を、親指で上から下へすくいとる。



③ X印を、親指で上から下へすくいとる。



④ X印を、小指で下から上へすくいとる。



(2) パタパタはたき

① ひもを、両方の小指と親指とにかける。



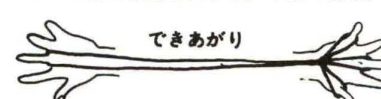
② X印を、1回ひねって左中指にかける。



③ ひもの間から、X印を右の中指にとる。



④ 左の小指と親指をはずし、中指で引く。



3・4 図間は、こんな演技をすると楽しい。

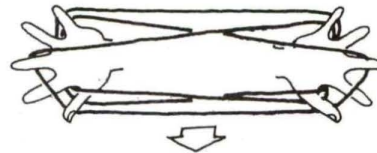
てのひらを、開いたりすぼめたりして、あそぶ。

ほら、ゴムのよう伸び縮みするでしょう

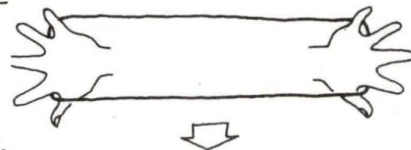
ひとりあやとり

連続どり

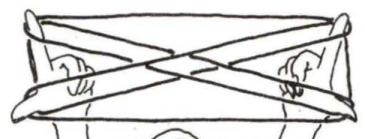
⑥○印を越え、×印のひもを親指でとる。〔1〕たすきがけ



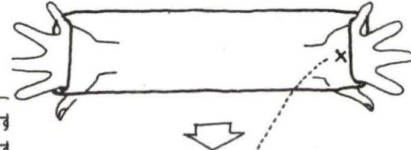
①親指以外の4本の指に、ひもをかける。



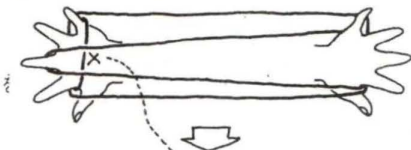
⑦両方の小指と中指を、ひもからはずす。



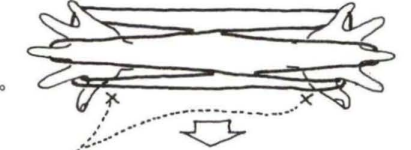
②手先をかえして、1回ずつ巻きつける。



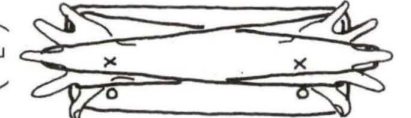
③先に、左の中指で、×印のひもをとる。



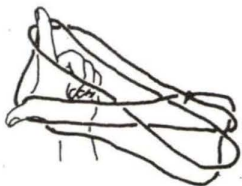
④次に、左の中指で、×印のひもをとる。



⑤×印のひもを、両方の親指でとる。

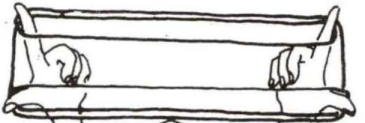


〔2〕川



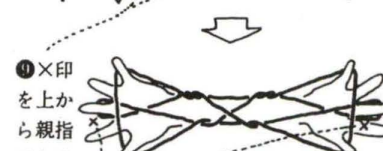
⑧右手の指をはずす。

⑨左手の指にあわせて、右手を滑らせる。

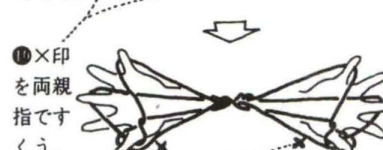


〔3〕はしご

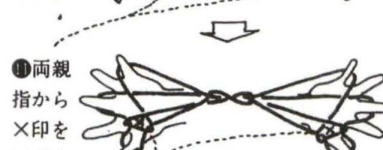
⑥両親指をまげてははずす。



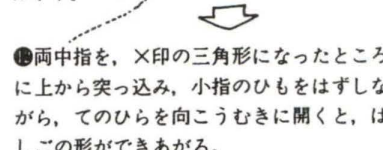
⑦×印を上から親指でとる。



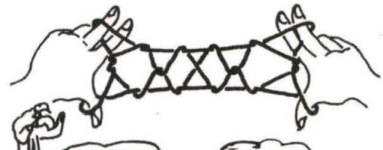
⑧×印を両親指ですくう。



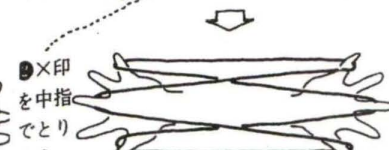
⑨両親指から×印をはずす。



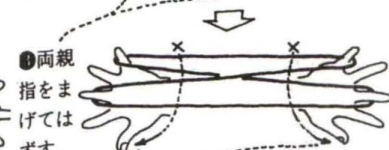
⑩両中指を、×印の三角形になったところに上から突っ込み、小指のひもをはずしながら、てのひらを向こうむきに開くと、はしごの形ができあがる。



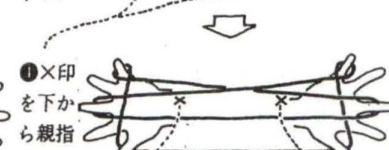
①両親指と小指にかける。



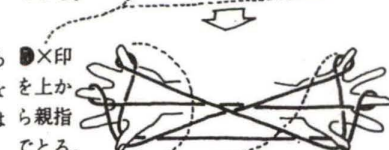
②×印を中指でとりあう。



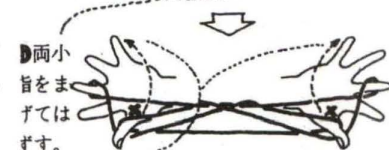
③両親指をまげてははずす。



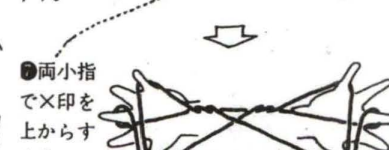
④×印を下から親指でとる。



⑤×印を上から親指でとる。



⑥両小指をまげてははずす。

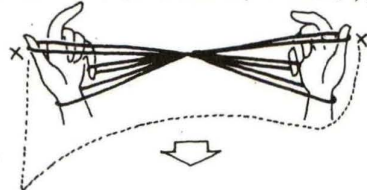


⑦両小指で×印を上からすくう。

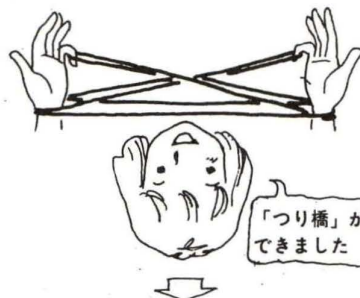


[4] つり橋

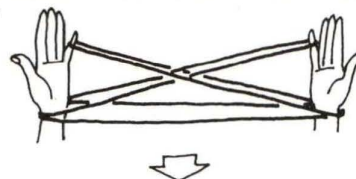
②⑤ X印のひもを、手首まで、ずりおろす。



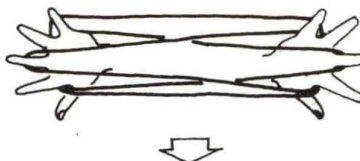
②⑥ X印のひもを、手首までおろすと、「つり橋」ができる。



②⑦ 小指をのばすと、ひものよじれがとれる。

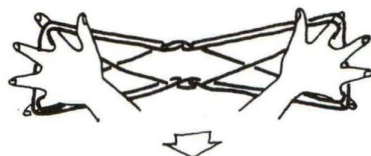


②⑧ 小指のひもを、中指にかけかえると、完全に、4図にもどる。

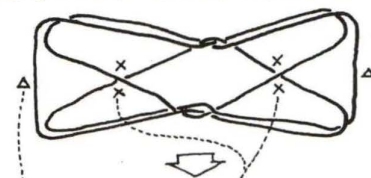


②⑨ こうして、次つぎに同じことをくり返して、「たすきがけ」、「川」、「ツツミ」、「つり橋」などをつくってあそび、何回、まちがえないでつくれたかを競ったりする。

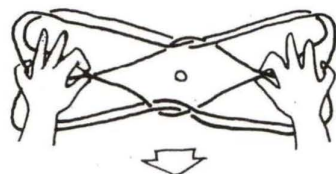
②⑩ 裏返すようにして、机の上に伏せる。



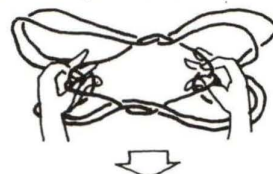
②⑪ 形をくずさないように、手をはなす。



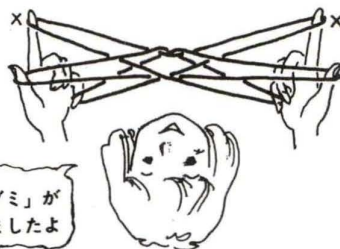
②⑫ △印に小指をかけ、X印をつまむ。



②⑬ つまんだ両指先を、菱型の○印のところへ、下から上のほうへ突きだす。



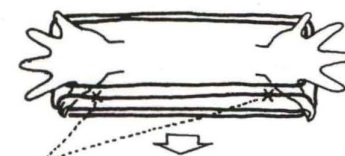
②⑭ 両手をひらくと、「ツツミ」(鼓)の形になる。



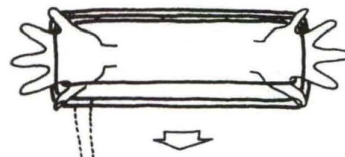
【参考】 ①と②の順序が逆だと、川の形が正しくできないので注意しよう。

[3] ツツミ

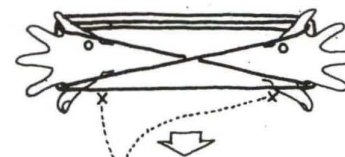
① 人さし指のところに残りの指を入れる。



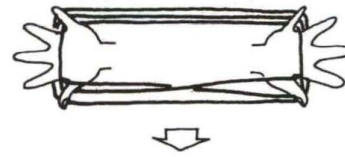
② X印のひもを、両小指にとる。



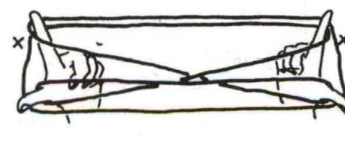
③ 両親指のひもを、はずす。



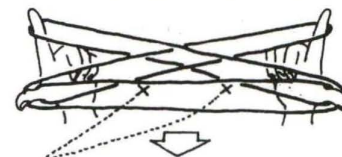
④ 両親指で、X印のひもと、つづけて○印のひもとる。



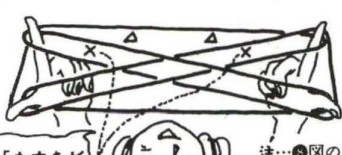
⑤ 小指、薬指、中指の3本のひもをはずす。



⑥ X印のひもを、両人さし指からはずす。



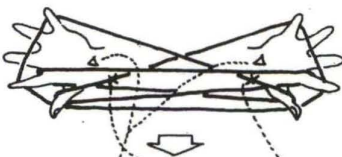
⑦ X印のひもを、両人さし指でとる。



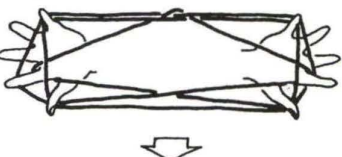
「たすきがけ」にもどりましたよ

注...⑤図のようにすれば、⑥図の「川」になる。

⑧ X印のところへ、両小指を下からだして△印のところへ突っこむ。

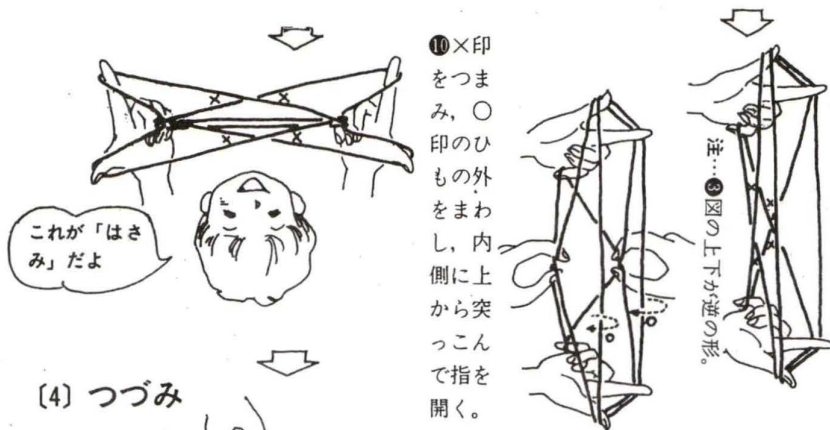


⑨ 両小指で、△印のひもを越して、X印のひもとる。



⑩ 両親指のひもを、はずす。





(4) つづみ

⑩相手は、X印をつまみ、そのまま指先を、O印の2本のひもの間に、下から上へ突っこんで、指を開く。

⑪△印のところに両手の小指をかけ、X印をつまんで、中央の菱形のところに、指先を下から上へ突っこみ、指先を開く。

⑪相手は、X印をつまみ、O印の外をまわして内側に下から上へ突っこみ、指を開く。

⑫X印をつまみ、O印の菱形に指を突っこんで開く。

注...この形は⑪図に同じ。

ふたり あやとり 連続とり

(1) たすきがけ

①長さ130 cmほどのひもの輪を両手首にかける。

②手首をまわし、左右の手首に1巻きをつくる。

③X印を中指でとりあう。

④相手は、X印を両手でつまむ。

⑤相手は内側⑤その指先を、O印の間のひも下から入れて、指を開く。を小指で図のようにとる。

⑨O印のひもの外側を、下から両手を入れて、親指と人さし指をいっぱい開く。

これが「たすきがけ」ですよ

(2) 川

⑥「たすきがけ」の形の、X印のところを、両手の指でつまむ。

⑦これを外へまわして、O印のひもの下から中へ突っこみ、親指と人さし指をいっぱい開く。

できあがり

これが「川」だよ

(3) はさみ

できあがり

またあしたな

寄せられたアソビのテーマはまだ半分にも至りませんが、前号に対していろいろな問題提起をいただきました。

その内でも特に真剣に考えなければならぬのは、わたし達の遊びのスペースであった道路が、都市化、合理化、簡便化の名目と共に経済効率、資産評価高揚を目指し、そしてモータリゼーションの名のもとに完膚なきまでその空間を奪い取ってしまい、その代替を与えることもなく子供達を追いついてしまったことです。

昔は「おもてへ行つて遊んでこーい」と放り出されまして、親しい友達の近くまで、かなりの距離でも遠征したものです。

今では部活、塾、習いごと、テレビゲーム、メール等々殆どが単独の行動と作業に忙しく、極端なことを申せば季節も、天候も関係のない生活環境で過ごしているように思われます。

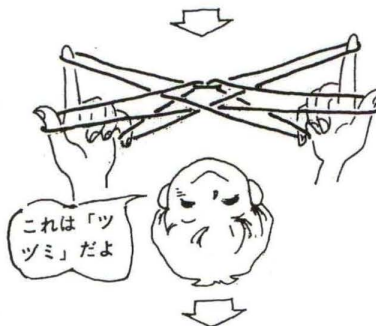
確かに集合住宅が増えて、義務的に基準通りのグリーンゾーンは存在しますが、それは防災用であり、美

⑮こうして、2人で次つぎにとりあっている、「川」、「たすきがけ」、「つづみ」、「はさみ」をつくっていく。

【注意】

相手からとるとき、指先を上を開くか下を開くかで、形が変わってくる。

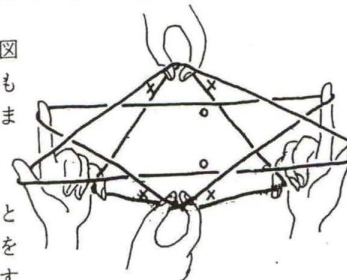
そうして、もとの原型にもどるばあいもあるもので、いろいろにくふうしてみよう。



⑮ いろいろな変化

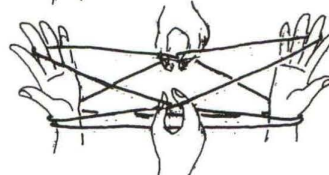
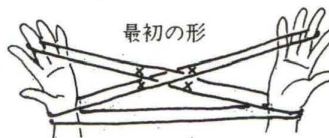
⑮上図

のひものまじわっているところをほぐすと、この図のようになる。



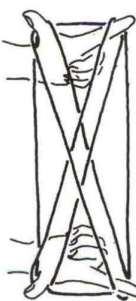
【参考】あやとりの変化の例

最初の形

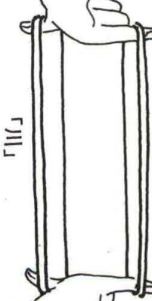


上に開く

下を開く

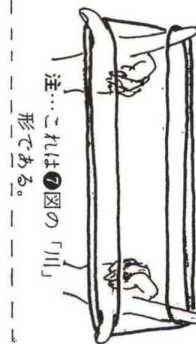


「たすきがけ」



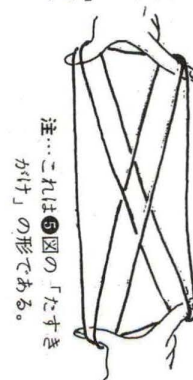
「川」

⑮上図の×印をつまみ、○印の間に下から突っこみ、指を開くと「川」になる。

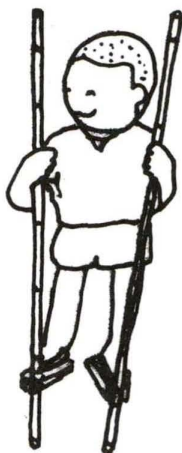


注…これは⑮図の「川」形である。

⑮○印の間を上から突っこめば、「たすき」になる。



注…これは⑮図の「たすき」の形である。



的環境整備であり、借景保護であり、CO2がどうかこうとかのスペースであって、キャッチボール禁止、サッカーボール持ち込み禁止なんて標識だらけです。アソビ場所がなくなったというより必要なくなったと考えられる説もありますが、来世紀はどういう社会になるのか、これからの子どもさん達はどのような生活環境となつてゆくのか、不安をいっばい胸に抱いております。

すくなくとも私達が元気な間に、足で歩ける道、安全に走りまわることの出来る道を、国を挙げ、地域を挙げて具体的実現への積極活動を展開しようではありませんかーとのご提起は、千里山在住の中野直衛氏です。

千里山時代のあそび

その2 完